

# ヤマト王権と九州の古墳文化

兵庫県立考古博物館館長 和田晴吾

## はじめに

有明海沿岸の古墳文化はおもしろい。

### 1 古墳とは何か

古墳時代の人々は強い祖先信仰のもと、人は死ぬと鳥が先導する船に乗って他界（あの世）へ赴くという他界観を持っていた。首長の葬送儀礼では、その様子を模擬的に実践し、遺体を船に乗せて古墳へと牽引した。古墳の表面には葺石や埴輪（土・木・石）で他界が表現され、亡き首長の魂はそこで安寧に永遠の命を生きた（図 1）。埴輪がすべて現実的なものであることから判断して、他界は現世の延長上にあると考えられていた可能性が高い。古墳は、墓であるとともに、亡き首長の冥福を祈る葬送儀礼の舞台装置でもあった。

### 2 古墳の秩序

古墳は政治的にも利用され、大王を頂点とする政治的地位に応じて、形と規模を基準に序列的な秩序を形成しつつ造られた。しかも、その秩序は、墳丘上に他界が表現されたこともあって、現世のみならず他界をも律する秩序となった。この秩序を成り立たせていたのがヤマト王権で、王権は各地の古墳の築造を直接的・間接的にコントロールしていた。したがって、いつ、どこに（墓域）、どのような形と大きさの古墳を造るかは、王権と各地の首長の関係性のなかで主に地政学的な観点を重視して個別的に決められたようで、首長の地位は長くはつづかず、古墳群は継続性に乏しい。特に中期はそうである（図 3・4）。

### 3 古墳づくり

古墳づくりは造墓組織の元に多くの人・もの・情報が集められ、多様な分業と大規模な協業によって行われた。交換経済が未発達で、流通の中心は王権からの様々な下賜とそれに対する首長からの貢納と奉仕だったが、その中で古墳づくりは人・もの・情報を流通させる原動力となり、地域社会の、ひいては王権全域の活性化に役だった。古墳づくりは国づくりでもあった。また、その現場は軍事拠点となり、交通インフラ整備の拠点ともなった。

### 4 大王墳と地域の古墳の動向

大王墳は前期前葉～中葉には奈良盆地南東部のオオヤマト古墳群、前期後葉には盆地北部の佐紀古墳群西群、さらに中期には大阪平野南部の百舌鳥・古市古墳群、後期中葉には平野北部の三島地域、後期後葉には奈良盆地南部の飛鳥周辺に造られた（図 2）。この墓域の移動は、王宮の移動を示すのではなく、王権の内外政策と密接に関係し、各地の古墳群の消長に大きな影響を与えた。その中で今回問題とするのは中期から後期への変化である。

### 5 中期から後期へ（第1段階・首長連合体制の変革）

中期は各地で地元を支配する首長たちが政治的に結集した首長連合体制の成熟期で、首長間の格差が大きくなり、大王はじめ限られた数の大首長が数多くの中小首長を支配する体制であった。ところが、後期前葉（5世紀後葉・雄略朝頃）になると、①中期の大型古墳群が急速に衰退・消滅する一方、新しい墓域に古墳群が出現、②小型円墳群（古式群集墳）

が出現（王権による民衆の直接支配の始まり）、③百舌鳥・古市古墳群の衰退（古市・岡ミサンザイ古墳を最後に大王墳縮小）などといった大きな変化がおこった。

それは、王権中枢が内外の情勢に対処するため、首長の地元支配を解体し中央集権的な体制を目指したが、大首長たち旧勢力の抵抗が強く王権自体が弱体化したものと解される。

## 6 有明海沿岸勢力の台頭

この現象に反比例するかのごとく勢力を拡大したのが九州の有明海沿岸を中心とした勢力である。この地域の古墳に特色が表れだすのは主に埋葬施設で、前期後葉には舟形石棺（畿内の中期は長持形石棺・図 5）、中期には横穴式石室（肥後型）（畿内は石室なし）、石障・屍床・妻入横口式家形石棺（開かれた棺）、石障系装飾古墳などが現れ、墳丘には石製表飾（石人石馬）が立てられた（図 7）。後期前葉に入ると新しい古墳群が出現。石屋形が造られ、肥後中部の阿蘇ピンク石（馬門石）製石棺が瀬戸内・畿内へ運ばれた（図 8）。いずれも「筑紫政権」や「環有明海首長連合」と呼ばれる勢力の充実ぶりを示すが、この勢力は旧勢力最大で最後のものといえる。この勢力と日本海沿岸、特に越前との前期以来の関係を考慮すると、この勢力が継体擁立の背後で重要な位置を占めた可能性が高い。朝鮮半島南西部を中心とした前方後円墳や横穴式石室などもその関係で理解すべきだろう。

## 7 中期から後期へ（第2段階－中央集権的国家体制の始まり）

（継体大王－507 年河内国樟葉宮で即位、526 磐余玉穗宮、531 崩御（古事記 527））

第1段階に出現した諸現象が再整備され、広範囲に展開し出すのは後期中葉（6世紀前半）からである。③新たな墓域に大王墳が復活（今城塚古墳・継体大王墳か）、②企画性の高い横穴式石室をもつ新式群集墳が急増（民衆の王民化）、①首長墳の増加と段階的円墳化（官人化）などがそれを示す。527 年、有明海勢力の盟主と推測される筑紫君磐井の乱が起こり、その平定後の後期中葉後半以後の継体・欽明朝期には急速に集権的な体制が進展した。

## 8 有明海連坊のその後

しかし、乱後、有明海勢力に急速な衰退の兆しはなく、筑後・筑前の墓制には肥後の菊池川流域起源の石屋形（平入横口式家形石棺・図 6）や彩色壁画（畿内なし）などの影響が広がり、後期後葉には関東北部～東北南部の太平洋沿岸にも影響を与えた（石室、横穴、彩色壁画）。一方、北部九州にも新式群集墳が広がり、筑前ではミヤケ関連の遺構が発見されだす。終末期（飛鳥）の畿内系の方墳は豊前・豊後・筑前・対馬などで見つかっている。

おわりに

天野末喜 1993「大王墳の移動は何を物語るか」『新視点 日本の歴史』2、新人物往来社

高木恭二 2008「西九州古墳文化とその特質」『古代日本の異文化交流』勉誠出版

蔵富士 寛 2011「九州北部」『講座・日本の考古学』第7巻、青木書店

柳沢一男 1991「九州古墳文化の展開」『新版・古代の日本』第3巻、角川書店

柳沢一男 1995「岩戸山古墳と磐井の乱」『継体王朝の謎』河出書房新社

和田晴吾 2014『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館

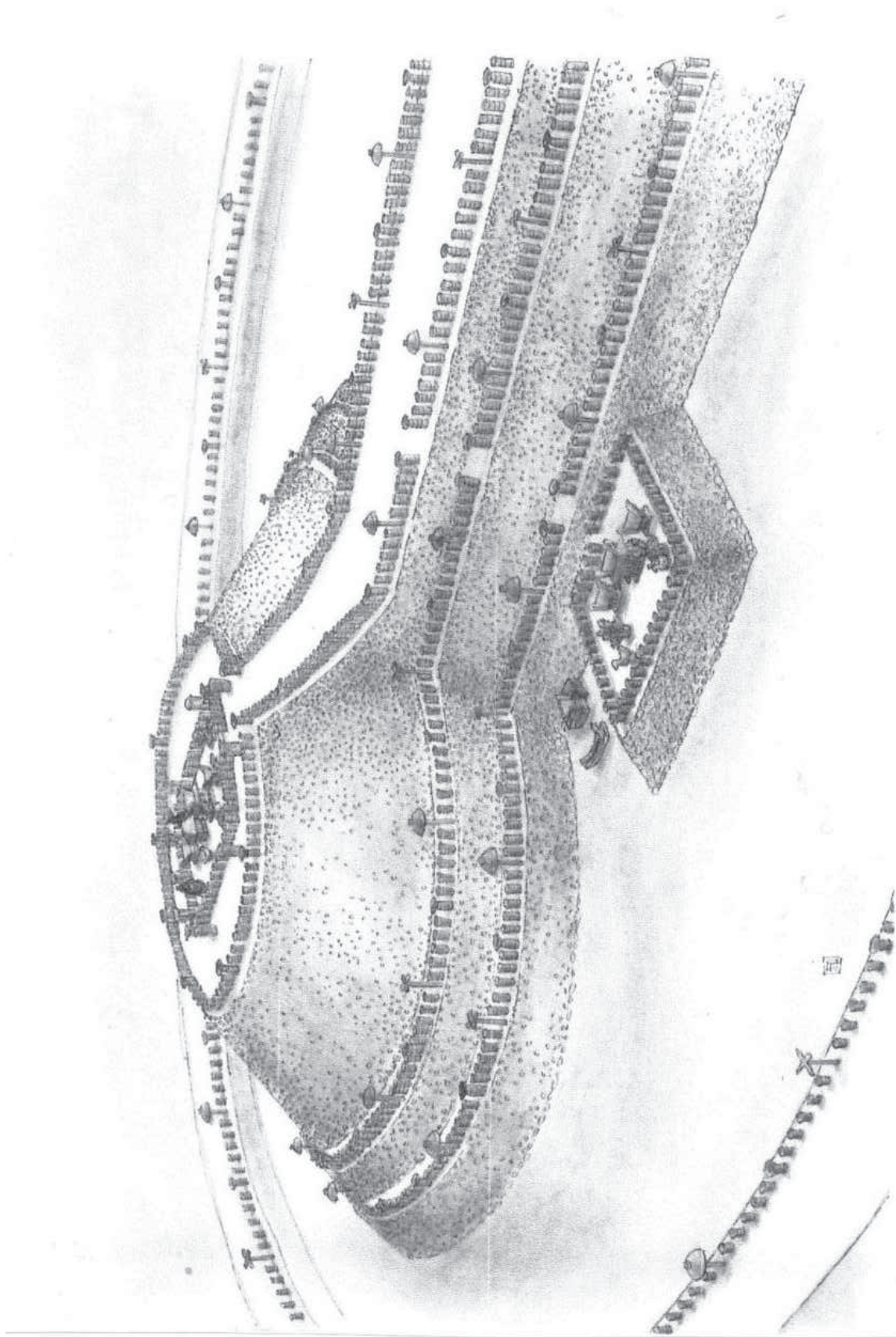


図1 前方後円墳完成時の推測図（中期前葉、原図：早川和子）





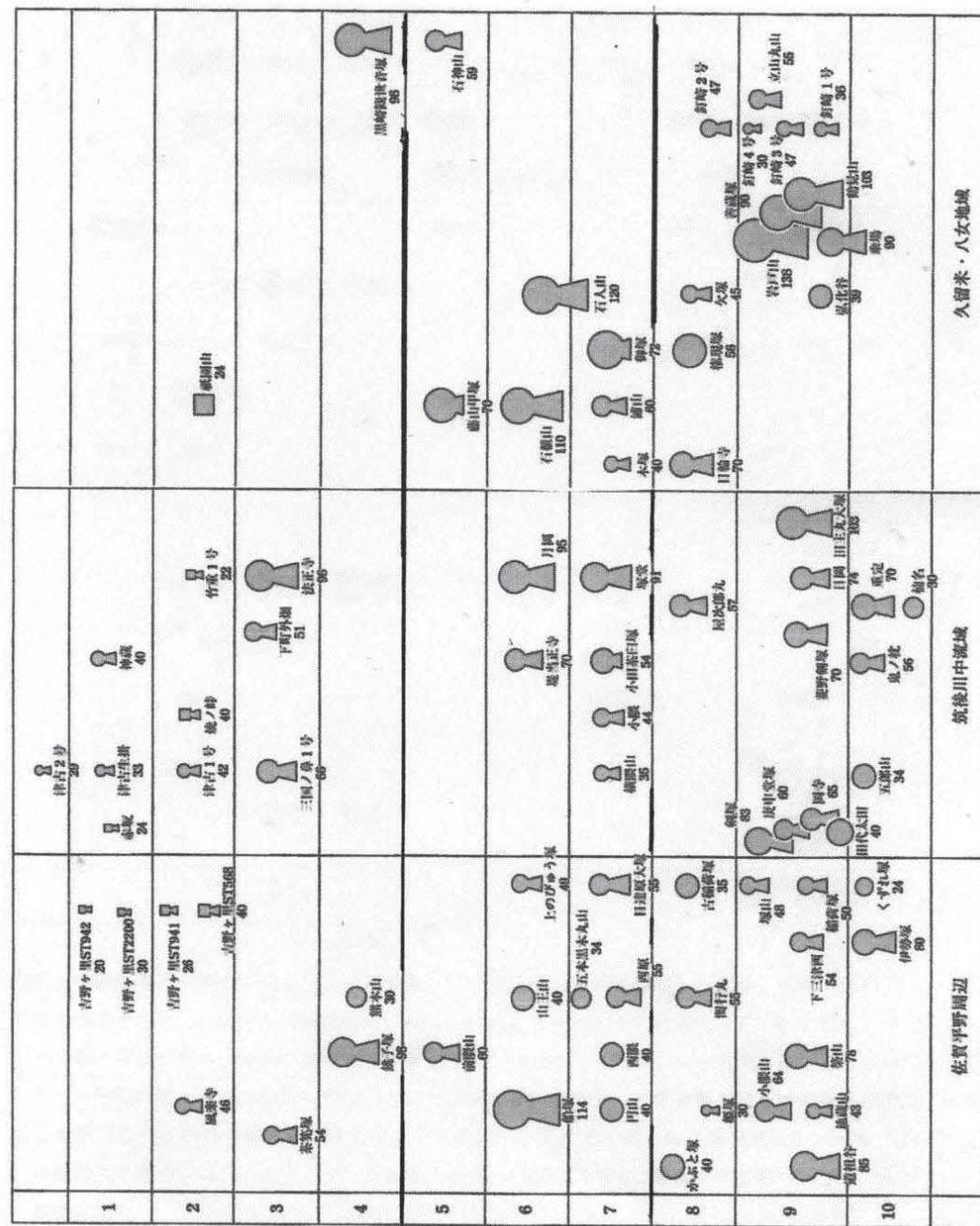


図3 有明海沿岸（佐賀～八女）の古墳編年図[蔵富士2011]

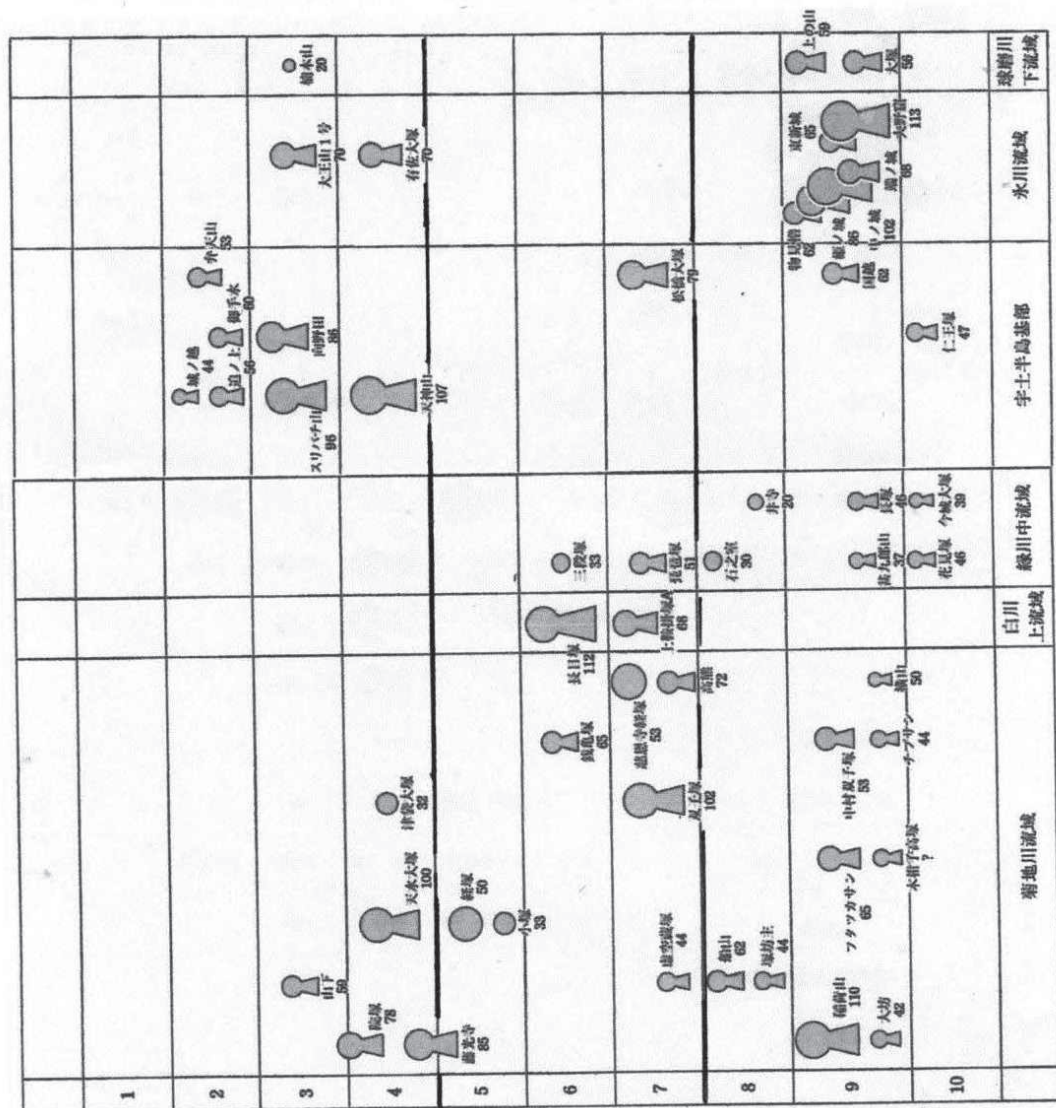


図4 有明海沿岸（熊本）の古墳編年図[蔵富士 2011]

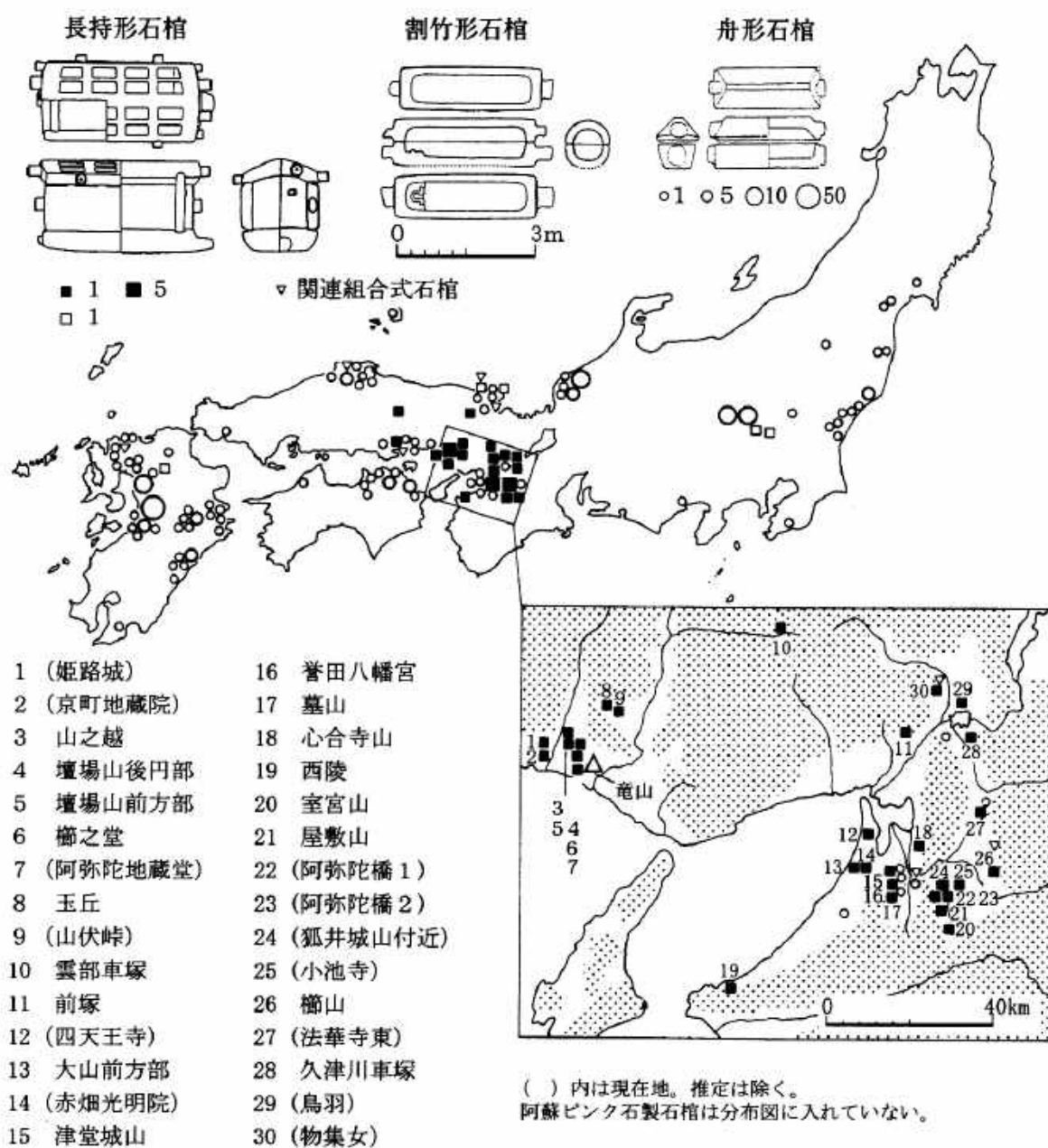


図5 長持形石棺と割竹形・舟形石棺の分布図[和田 1996]



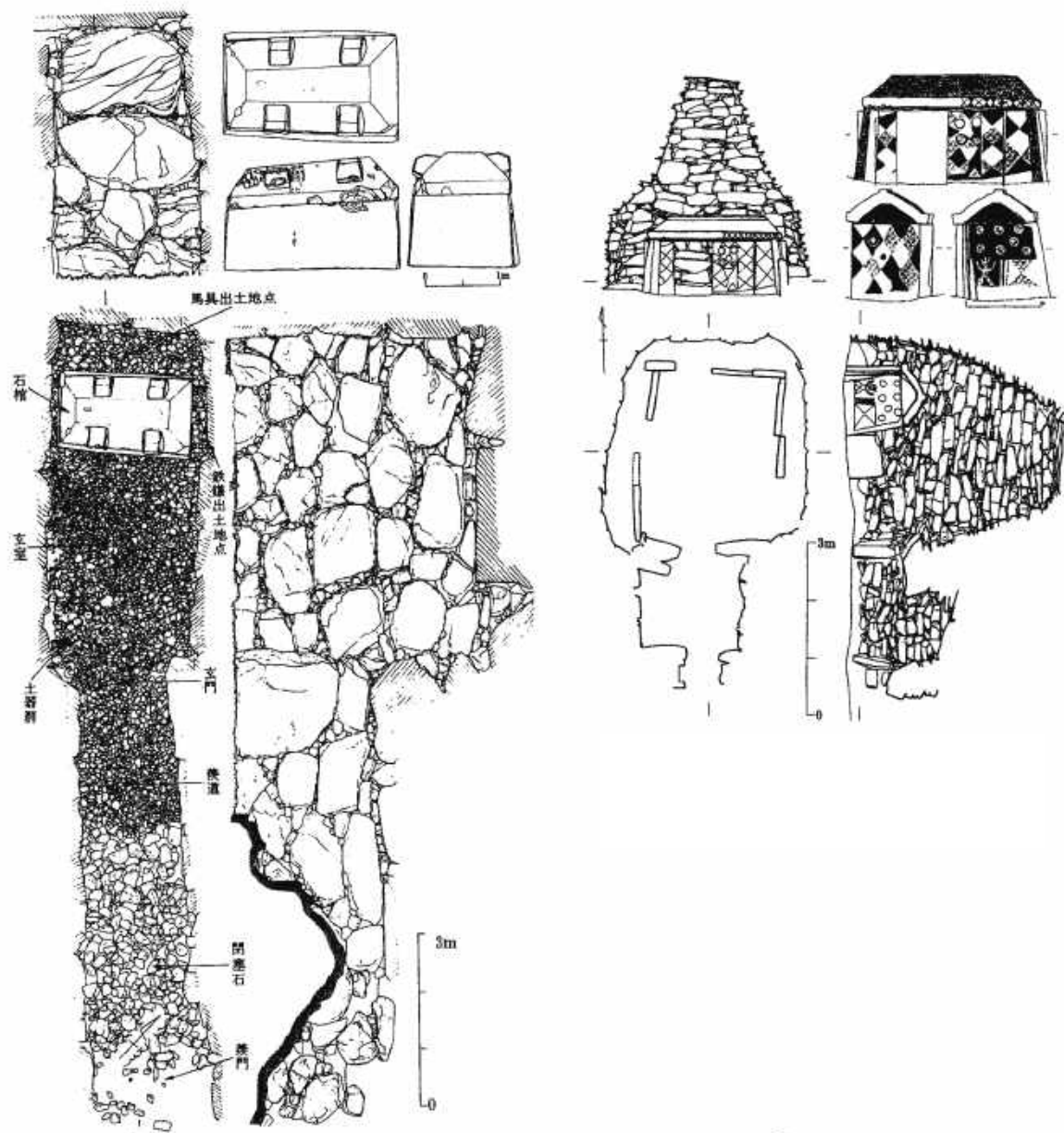


図6 畿内と九州の横穴式石室と家形石棺（左：藤ノ木、右：チブサン、報告書より）





図7 石製表飾（石人石馬）と横口式家形石棺の分布図[柳沢 1991]

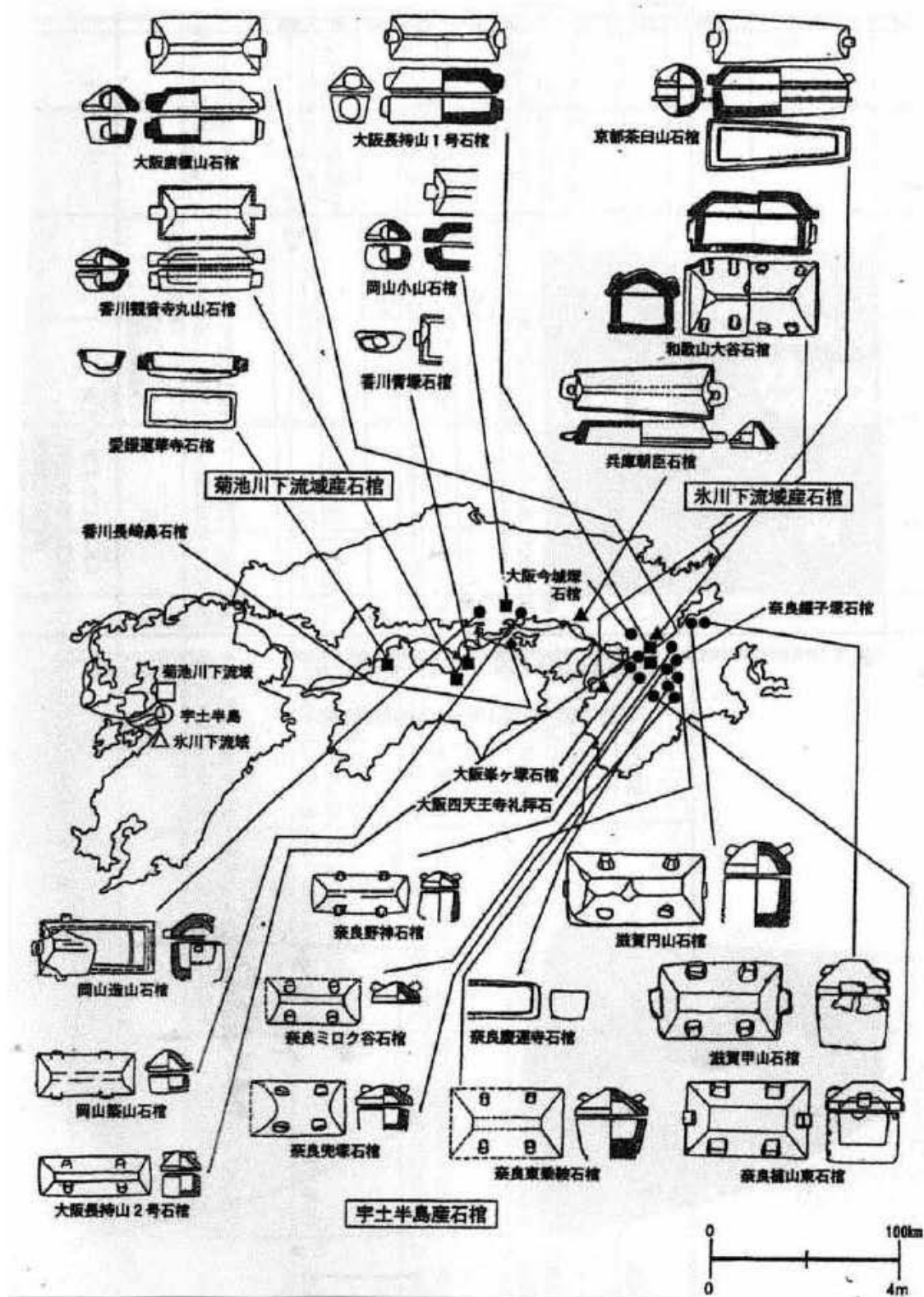


図8 瀬戸内・畿内へ運ばれた阿蘇石製の舟形石棺と家形石棺[高木 2008]